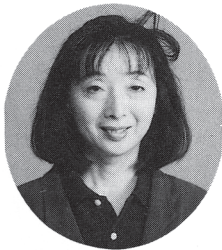


(Japanese Academy of Learning Disabilities)

日本LD学会会報

第20号

JALD

事務局：東京学芸大学心理学研究室 内 〒184 東京都小金井市貫井北町4-1-1
TEL&FAX. 0423-27-2890

LD児支援の総論から学ぶもの

長崎大学医療技術短期大学部助教授

土田 玲子

最近とみに教育現場からLD児の対応について質問を受ける機会が多い。このことはもちろん悪いことではないのだが、今後LDという言葉がどのようなイメージで一人歩きしていくのか、少々不安と責任を感じている。

それは、この子どもたちの“個性”とそれに対する特別な対応の部分のみがあまり強調されすぎると、LD児に限らずどんな子どもたちにとっても必要な、“普通の、当たり前の”教育観、療育観の部分霞んでしまうように感じるからである。

私個人の体験として、LD児との出会いから一番学んだのは実は、特別な指導法の有効性というよりも、この“当たり前”の関わり大切さである。

- 1人の人間として尊重され、愛され、受け入れられ、自分の存在に自信を持てる事の大切さ。
- 興味を生かした課題、楽しい課題を提示してこそ子どもの意欲や積極性が引き出せること。
- 成功体験の大切さ。ゆえに子どもの力に合わせ

わかるように教えること、できるように支える指導が基本であること。

- どのような子であれ、人というものは1人1人が異なった力を持ち、異なった育ち方、学び方をするものであるから、その個人に合わせた目標と指導が基本になること。

- 人生の価値とは、生き生きと生きること。

このような当たり前な事が、まずLD児を支える大きな前提となる。これをLD児支援の総論とするならば、これだけでも学校での大きな不適応問題が解決してしまうことすらある。そして意外にも今の子どもたちの多くがこの総論すら保証されていない現実がある。

とするならば、LD児のサポート論とはまず、どんな子どもたちにも共通するこの基本的な教育観、療育観の重要性を改めて提示するところに大きな意義があるのではないだろうか。LD児に対する社会の理解と興味がこのような方向にも大きな実りを産んでいくことを願っている。